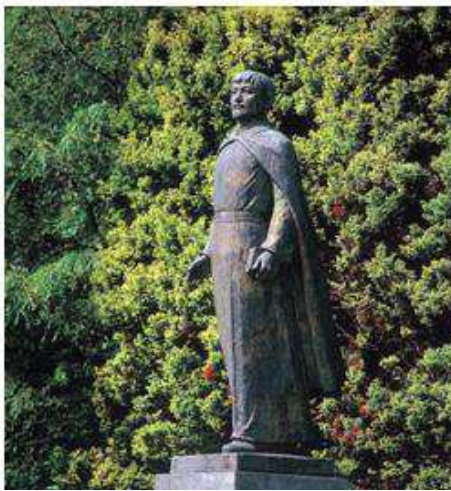


隠退記念旅行記（6） ペトロ・カスイ岐部

杵築教会のお姉様の車に乗って、両子山の向こうの杵築の真北に向かいました。豊後水道に浮かぶ姫島と向かい合う国東市国見町に行きました。国東半島は「仏の里」と言われているそうです。半島の中央に両子山(721m)があり、その峰を目指す山岳修行が平安時代末期から現在までも展開され、神道と仏教が習合した社寺、石塔があり、長い伝統と祭りが脈々と受け継がれている場所です。

同時に戦国時代には豊後の国としてキリシタン大名大友宗麟の影響も受けていたのです。大友氏の重臣岐部氏もこの地でキリシタンになり、その息子がペトロ岐部(1587 - 1639)として、歴史に名を残す人物となりました。国見町にペトロ・カスイ岐部の記念公園があります。杵築を多少知っているつもりでしたが、この人物のことを最近まで全く知りませんでした。長崎26殉教者記念像を



ペトロ・カスイ岐部像 舟越保武

制作した舟越保武氏によるペトロ岐部の記念像がここに、西（ローマ）を向いて建てられています。チャペル、資料館などもありましたが、キリスト教がここに根付いているというのではなく、ここで彼が誕生しただけなのが、寂しい感じです。

彼はここで生まれ、セミナリオで学び、カスイと号し、司祭となって働きたい願いを持ちながらイエズス会には入れてもらえませんでした。迫害が激しくなり、マカオに追放されても、彼の願いは消えず、1618年頃、単独でローマへ向かいました。船旅をしてゴアに着き、そこから徒歩で山岳、砂漠を超え、エルサレム巡礼をし、2年後にローマに辿りついたとのことでした。そこで彼の信仰を認められイエズス会の司祭となりました。彼より先に「天正遣欧少年使節」(1582年)や、伊達政宗家臣の「支倉常長ら一行」(1614年)がローマに渡りましたが、ペトロ岐部の日本～ローマ往復は「一人ぼっちの冒険」でした。帰国しようにも日本はすでに鎖国状態。また、キリシタンは各地で処刑、追放などの弾圧が始まっていました。1630年にやっと上陸し、密かに布教活動、また、隠れていた司祭や信徒を励まして回りました。とうとう1639年に捕えられ、過酷な拷問にも屈せず、殉教しました。52歳の生涯でした。日本にこんな人がいたとはと、感嘆するほかありません。

ザビエル来日の頃の、日本は戦国時代、封建時代であり、主従の関係が生死を決める厳しい武家の世界でした。そのころローマでは宗教改革の嵐が吹きはじめていました。イエズス会は高い学識と聖潔に立って教皇に絶対服従する騎士団のような修道会として生まれたそうです。イエズス会の信条は日本の武家社会に似ているともいえないでしょう。岐部一族にとっても、頭領の大友氏に従う一心があったのは当然でしょう。ザビエルはマタイによる福音書の日本語訳を持って日本に入国したそうです。キリシタンになった人々がどのような信仰を持つようになったのか、まだ私はわかりませんが、神を信じ、荒野での「悪魔（人間の欲望）の誘惑」に勝たれた主イエスの姿、さらに「敵をも愛せ」という信仰は彼らの心に全く新しい価値観を与えたのではないのでしょうか。

カトリック教会では、2008年11月24日に列福式が長崎市にて行われ、「ペトロ岐部と187殉教者」として福者に列せられたとあります。私は日本のキリシタンの歴史をあまりにも知らず、その信仰を学ぶことがなかったことを恥ずかしく思いました。杵築にも温泉があったのですが、満室とのことで、お姉様に駅でお別れし、その夜は久しぶりに別府で温泉を楽しみました。